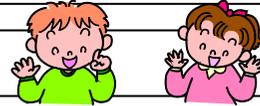




子どもたち一人一人が笑顔ですごく学校をめざして



はたらくことで、身に付く力

「折尾東小学校の子ども達のよいところはどんなところですか？」と先日来校されたお客様に聞かれました。私は「いろいろありますが、一つはよく働くことです。」と答えました。掃除の時間は、みんな一生懸命掃いたりふいたりしています。1年生もよく頑張っています。6年生が黙々と丁寧に掃除をする姿は全校児童のお手本になっています。子ども達の働く姿はとてもさわやかです。子ども達は、学校では、掃除、当番活動・係活動・委員会活動など、働くことから大切なことを学び、身に付けていると感じます。

家庭でも、子どもに役割をもたせ、その役割を果たす体験を重ねさせることで、子どもは生きていく上で必要な生活技能を獲得するとともに、家族の一員としての意識や責任感を身につけていきます。また、自尊感情や規範意識を高めていきます。

子どもの自尊感情（自分を大切に思う感情です。自尊感情が低いと「どうせ自分は何をやってもだめだ」とやる気もなくなります。）とお手伝いの関係の調査によれば、自尊感情の高い子どもの多くがお手伝いを「よくする」と答えています。

また、全国的な調査では、「食器をそろえたり、片付けたりする」「新聞や郵便をとってくる」「ペットの世話とか植物の水やりをする」といったお手伝いをしている子どもたちはそうでない子どもたちに比べて道徳観、正義感が高い傾向にあることが明らかにされています。

ここでは、家庭での取組として、子どもの家庭での役割、特にお手伝いについてのポイントを紹介します。

1 家庭でお手伝いをさせよう

ポイント1

昔に比べ、現代は、様々な電気製品の普及等で、生活がとても便利になりました。そのため子どもにお手伝いをしてもらう機会が少なくなっています。そこで、どうしてもお手伝いが必要だという状況を意図的に作ってみませんか。

たとえば、「△△ちゃん、今、手が離せないんだけど、〇〇してくれないかな。してくれるととてもたすかるのだけど」などと、声をかけるのもいいですね。手伝いをしなければいけない場づくりを家庭でひと工夫してみませんか。

2 どんなお手伝いをしてもらおうか決めよう

ポイント2

お手伝いは大事なことからと親が一方的に難しいことをさせても、長くは続きません。「これ〇〇ちゃんに手伝ってほしいなあ」「これはできるかな」など、子どもの年齢や発達状況、家庭の状況などに合わせて、できそうなお手伝いを提案してみてください。お手伝いは子どもが自分から「やりたいな」「やってみよう」という気持ちになることが大切です。

ポイント3

子どもたちはやったことがないことはできません。簡単なことから始めて、実際にできそうかどうか、どれくらいの頻度だったら無理なくできるか少し様子を見てください。自分できちんとできるようになって、次のお手伝いの内容を一緒に考えてみましょう。できることが増すことで子どもは自信や意欲を高めていきます。

3 お手伝いをしているときは

ポイント4

危険がともなうときはもちろん、手助けが必要です。しかし、それ以外は、できるだけ子どもにまかせ、見守るようにしましょう。

今の子どもは、体験することが少なく、できないことが当たり前です。まずは、失敗することも想定しながらやらせてみましょう。うまくいかなくても時間がかかっても、まずは、自分の力で最後までやってみるという経験がとても大切なのです。

どうしたらいいか尋ねてきたときは、わかりやすくなぜそうするのかなど話しながら一緒にやるといいでしょう。親子のよい関係を築くことにも役立ちます。

4 お手伝いをしてもらったら

ポイント5

子どもがお手伝いをしてくれたら、「ありがとう」「助かったよ」など、親として「うれしい」という気持ちを率直に言葉や態度で表現しましょう。たとえ、少し中途半端だったとしても「まだ、できていないじゃないの！」ではなく「ここまでしてくれたのね。ありがとう。」などやったことを認め、「次もやってくれるとうれしいな。」というように、やる気を持たせることが大切です。

お手伝いや家庭での役割を続けさせるポイント

- 簡単で、毎日できることから始めましょう。自然に習慣が身につきます。
- はじめは、要領やコツを教えながら親子で一緒に楽しみながらやってみましょう。
- うまくいかないときは、どうしたらうまくいくか一緒に考えてみましょう。
- 多少時間がかかっても、最後まで待ち、達成感を感じさせましょう。
- 「ありがとう」「助かった」など、感謝の気持ちを伝え、家族の役に立っていることや必要とされていることを感じさせましょう。